

はじめ  
元初にあった「ロゴス」(λόγος)について

遠藤 徹

—

ヨハネによる福音書第一章第一—十四節

- 1 初めに言ことば(<sup>1</sup>λόγος)があった。言ことば(<sup>1</sup>λόγος)は神と共にあった。言ことば(<sup>1</sup>λόγος)は神であった。
- 2 この言ことばは、初めに神と共にあった。
- 3 万物は言ことばによって成った。成ったもので、言ことばによらずに成ったものは何一つなかった。
- 4 言ことばの内に命があった。命は人間を照らす光であった。
- 5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。
- 6 神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。

7 彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。

8 彼は光ではなく、光について証しをするために来た。

9 その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。

10 言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。

11 言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。

12 しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。

13 この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。

14 言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。

ヨハネ福音書の冒頭で述べられるこの箇所の中で、*λογος* (言) という言葉が持つ意味合いは何であろうか。

我々は通常、ここで *λογος* (言) と言われているものはイエス・キリストのことだと直ちに受け止め、それ以上には何の詮索も行わずに読み進んで来ていることはないか。つまり、冒頭の一文は「初めにロゴス(イエス)があった。ロゴス(イエス)は神と共にあった。ロゴス(イエス)は神であった」との意味だと受け止め、



ἡλικία<sup>2</sup> のことであつたこと——を明言しているであらう。

確認しよう。

1 初めに、神は天地を創造された。 2 地は混沌であつて、闇が深淵の面にあり、神の靈が水の面を動いていた。  
3 神は言われた。「光あれ。」こうして、光があつた。 4 神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、5  
光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があつた。第一の日である。 6 神は言われた。「水の中に大  
空あれ。水と水を分けよ。」 7 神は大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになつた。  
8 神は大空を天と呼ばれた。夕べがあり、朝があつた。第二の日である。

(創世記 1・1-8)

初めに、神は天地を創造された。……神は言われた。「光あれ。」こうして、光があつた。……神は言われた。  
「水の中に大空あれ。水と水を分けよ。」神は大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのよう  
になつた。……

神が発し給う言葉——「主の言葉」——が光から始まって自然界の様々なものを、ついにはありとあらゆるも  
のを、存在させるに至つた。存在するすべてのものを無から有に到らせた。まさしく「創造」の働きを持った。

創世記冒頭部の言葉は、ありとあらゆることの中でこれに勝る大いなることはあり得ない、この畏怖すべき最大の出来事を高らかに宣言しているのである。

この想像を絶する大いなる出来事——「無」からの「万有誕生」の神秘に心を揺さぶられることなしに創世記冒頭という言葉を読むことは、聖書を全く読まないことであろう。この神秘に勝る大きな神秘はなく、今後どんなに科学研究が進展したとしても、それは未来永劫に亘って最大・最深の秘密・謎に留まり続けるであろう。

ところで、このことを受け止めて、ヨハネ冒頭の句に戻るとき、その含意は全体としてどのようなものか。

1 初めに言いひ(λέγος)があった。言いひ(λέγος)は神と共にあった。言いひ(λέγος)は神であった。 2 この言いひ(λέγος)は、初めに神と共にあった。

ヨハネは、明らかに、この一連の言葉を、創世記冒頭という言葉との響き合いの内に、書いたであろう。イエスキリストを「言いひ」(λέγος)として捉えているのであるが、無論単なる普通の意味での「言葉」、我々人間が語る「言葉」としてではない。天地創造の「初め」にあった「言いひ」(λέγος)、天地創造に当たって神と共にあった「言いひ」(λέγος)、そして神の天地創造の御業に与った「言いひ」(λέγος)、否、神であった「言いひ」(λέγος)として捉えているのである。そして、単に天地創造の初めだけでなく、今も、そして今後も、——未来永劫に亘って——神と共にあ

り、神である「言」として、捉えているのである。

ヨハネは、一言で言って、イエスの中に、天地を創造され、永遠に亘って天地を支配される神そのものを見ていたのである。

そうであれば、当然、「万物は言(λογος)によって成った。成ったもので、言(λογος)によらずに成ったものは何一つなかった」のである。

しかし、そのイエスを同胞のユダヤ人達は十字架上に葬り去った。そこから、また、続けて次のようにも言われる。

4 言(λογος)の内に(真の意味で人間を生かす)命があった。命は人間を照らす光であった。

5 光は暗闇の中で輝いている。(しかし)暗闇は光を理解しなかった。

10 言(λογος)は世にあった。世は言(λογος)によって成ったが、世は言(λογος)を認めなかった。

11 言(λογος)は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。

12 しかし、言(λογος)は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。

13 この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。

14 言(λογος)は肉となつて、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であつて、恵みと真理とに満ちていた。

二

さて、最初の問題に戻つて、「初めにλογοςがあつた」と言われている、そのλογοςとは一体何か。それは既に見た。神が、天地万物の創造に当たつて、「……あれ」と発した、その言葉である。しかしあらためて問題にしたいのは、そのことではなく、その神が発した言葉とは、現代の我々が現代の知識に立つて受け止めるときには、何か、ということである。天地万物を現にあるようにさせた、また今もあるようにさせている、一番大元のλογοςとは、現代の我々の語彙で言えば、何か。

それは「法則」ではないか。法則が初めにあつて、その法則に従つて宇宙は誕生し、且つその後の発展・展開を続けて来ているのではないか。ヨハネは、今の我々の知識で言えば、法則に当たるものを「ロゴス」と呼んでこの冒頭の一文を書いたのではないか。従つて、「初めに言があつた。言は神と共にあつた。言は神であつた」は現代の我々の言葉に置き換えれば、「初めに法則があつた。法則は神と共にあつた。法則は神であつた」ではないか。

そもそも *νόμος* という語に「法則」という意味合いは無いのであろうか。ヨハネはその意味で「ロゴス」という言葉を用いながら、当の一文を書いていることはなかったか。

その可能性は無くはないと思われる。聖書の中で「ロゴス」が法則の意味で用いられていることが現に見出される一例はエズラ記7章12節である。諸訳を示せば以下の通りである。

◆ BHS HEBLUE OLD TESTAMENT (4<sup>th</sup> Edition)

אֶת־הַחֹקִים אֲשֶׁר־צִוָּה אֱלֹהֵינוּ לַעֲשׂוֹת  
 מִלִּפְנֵי הַמֶּלֶךְ מִלְּפָנֶיךָ יְהוָה אֱלֹהֵינוּ  
 אֶת־הַחֹקִים אֲשֶׁר־צִוָּה אֱלֹהֵינוּ לַעֲשׂוֹת  
 מִלִּפְנֵי הַמֶּלֶךְ מִלִּפְנֵיךָ יְהוָה אֱלֹהֵינוּ

◆ BIBLE WORKS GREEK

**Ezra 7 : 12** Αθεασαθεν βασιλευς βασιλευων Εοδρα γραμματει τον θεου τον ουρανου τετελεσται ο λογος και η  
 ἀποκρισις

◆ VULGATA



元初にあった「ロゴス」(λόγος) について

**Ezra 7 : 12** Artaxerxis rex regum Ezrae sacerdoti scribae legis Dei caeli doctissimo salutem

◆ KING JAMES'S VERSION

**Ezra 7 : 12** Artaxerxes, king of kings, unto Ezra the priest, a scribe of the law of the God of heaven, perfect peace, and at such a time.

◆ LUTHER UNREVIDIERTE BIBEL

**Ezra 7 : 12** Artahastha, König aller Könige, Ezra, dem Priester und Schriftgelehrten im Gesetz des Gottes vom Himmel, Friede und Gruß!

◆ 共同訳 7・12 「諸王の王であるアルタクセルセスは、天にいます神の律法の書記官、祭司エズラに心からの挨拶を送る。

◆ 新改訳 7・12 「王の王アルタシャスタ。天の神の律法の学者である祭司エズラへ。この件は完了した。

◆ 口語訳 7・12 「諸王の王アルタシャスタ、天の神の律法の学者である祭司エズラに送る。今、

へブル語原典の  $\text{דְּבַר}$  は 1) decree, law 1a) a decree (of the king), 1b) law, 1c) law (of God) と解説される語であり、まさに「法則」と訳すこともできる語である。それをギリシア語訳は  $\lambda\omicron\gamma\omicron\varsigma$  と訳しているが、ラテン語訳 (legis)、英訳 (law)、独訳 (Gesetz) のいずれも同様である。日本語訳聖書は「法則」ではなく、「律法」と訳す習いであるが、ユダヤ教でも律法は根本的には人間が決めるものではなく、第一次的には神が定めたものだと考えられていたところからすれば、「法則」と訳す方が適切かも知れないのである。

こうして、 $\lambda\omicron\gamma\omicron\varsigma$  を「法則」「律法」と訳している実例はあるのであるが、ただ「法則」と訳すことが問題である点がなくはない。それは我々が用いる「法則」という概念がきちんと生まれたのは近代になってからであって、聖書が書かれた古代にはそれはなかったことである。もう少し正確に言えば、自然界の法則の存在が知られたのは近代になってからであった。数学(幾何学)の法則は古代にも発見されていた。しかし数学の法則は自然界の事物を誕生させたり運動させたりする法則ではない。数学の法則は事物の存亡とは無関係な、観念的・理念的な (ideal、イデア的) 世界の法則である。数学の法則そのものが事物を現実に存在させるわけではない。その法則に従って事物(完全なものとは言えない円形や直角三角形)を現実の世界に存在させるのは人間である。<sup>(5)</sup> それに対して、自然界で事物を現実の世界に存亡させたり運動させたりするものが「法則」(自然法則)と我々が呼ぶものである。同時に法則は「実践的法則」としても、つまり人間のあるべきところに関しても存在すると考えられ、それは現実的には王や宗教的指導者によって定められたとしても、大元は神によって定められていると考えられたであろう。日本語訳の聖書はその場合は「律法」と訳しているが、欧米語訳では「法則」と同じ

こういう次第であるから、聖書の記者（ヨハネ）自身が νόμος という語を「法則」の意味で記したと見ることはできないが、ただ、現代の我々が νόμος を「法則」と理解して聖書を読むことは可能であり、それがむしろ聖書記者の真意を汲み取ることになるのではないかと思われるのである。<sup>(6)</sup>

### 三

ところで、このことを確認することは、計り知れなく意義が大きいと筆者には思われる。先走って言えば、それは我々が「宇宙」と呼んでいる世界とは別の世界が実在することを証明しているからである。ヨハネは「この世」とは別の「彼の世<sup>か</sup>」が実在することを確信していたのではないか。<sup>(7)</sup>

そもそも法則というものはどこに存在するのであろうか。法則は、言うまでもなく、「物質」ではない。「物質」であるものは、どんなに微細なものであっても、必ず宇宙の中に、一定の時間的・空間的「場」を占めて存在しているはずである。しかし法則は、物質ではない以上、そうではない。法則は宇宙の中に一定の時間的・空間的「場」を占めて存在している物質を「支配」し、そこに存在させている。しかし法則そのものは宇宙の中に存在することはなく、むしろ宇宙の「外」に存在していると言わなければならない。但し、「外」と言っても、宇宙の

外側の別の時間・空間的場所に存在するという事ではない。宇宙とは時間・空間的世界の総体の事なのであるから、その「外」に存在するということは、「時間・空間が存在しない別の世界」に存在するということである。つまり、「時間・空間が存在しない別の世界」が存在するはずなのであり、法則の存在はそのことを示しているのである。「時間・空間が存在しない別の世界」が存在しないなら、法則は存在しないはずなのである。

更にまた、宇宙とはその中にすべての物質が存在する世界のことなのであるから、法則が宇宙の「外」にあるということは、法則は「物質が一切存在しない世界」に存在するということである。法則は「時間も存在せず、空間も存在せず、物質も存在しない世界」に存在するのである。要するに、法則は宇宙とは別の場に——いや「場」と言うとき空間的な場所になってしまいうから、むしろ——別の「次元」に存在するのである。法則は完全に「非物質」であるからそういうことが可能なのである。しかも法則は宇宙とは別の次元に存在しながら、しかも宇宙を存在させ、またその中に存在する一切の物質を、時間空間の中のどこかに存在させ、或いは時間空間のどこかへ動かし、変化させ、こうして宇宙内部の一切の物質の状態を、いや、宇宙全体を、「支配して」いるのである。法則がこのように「支配している」ことを法則は「生きています」と表現することも可能であろう。宇宙内の全物質は他のものによって動かされてのみ動く。それを「生きていない」と言って正しいであろう。しかし法則は自らが物質を動かし、地球上の「生物」をも支配しているのである。法則はまさに「生きています」。

但し、その生き方は、もちろん、宇宙の中の一天体である地球上に存在している生物の生き方と同じではない。地球上で最も高度に発達した生物は人間であると言ってよいであろうが、人間が人間として生きていくためには、高度に発達した頭脳があって、そこからの指令に従って人間の体の全部分が動かなければならない。法則はそれ

と同じように生きてはいないはずである。しかし法則の命令に従って、宇宙の中の全物質存在が秩序立って動いているのである。法則の命令は、人間(もっともければ動物)の発する命令のように音声で行われということはなく、また文字や身振りで行われるということはないが、しかも確実に宇宙内のすべてのものを従わせているのである。法則が「生きていない」とどうして言えよう。

そういう不可思議な、そして偉大な、まさに何もものをも超えて偉大な、不可視の、最高度に「生きている」何かを、人類はいつからか「神」と呼び始めた。——これが事実であろう。

但し、「法則」というものをきちんとつかむようになったのは人類の歴史でそれほど昔のことではない。「法則」というものの明確な概念を持つようになったのは近代科学が誕生するようになってからである。法則の明確な概念を持つまでは、人類は我々が後に法則と呼んだものを「神」と呼んでいたであろう。しかし法則の明確な概念を持つてからは、人類は「法則」と「神」とはどういう関係にあるのか? という疑問を持たずにいられなくなった。「神」とは要するに「法則」のことだという考えの人もいたであろう。いや、神が一番大本の存在で、神が法則を定めた(創造した)と考える人もいたであろう。それは現代でも分ならず、永遠に分からないであろう。

「天地万物」——これは今の言葉で言えば「宇宙」であろう——を創造した究極の存在を「神」と呼んでいるのは「聖書」であるが、この聖書を基本にする宗教(ユダヤ教、キリスト教、イスラム教)では、神が一番大本の存在とみなし、法則も神が定めたと見ている。また、既に触れた「実践的法則」(「律法」)——「人間は、どう

いう状況では、「どう行動すべきか」という法則——をも神が定めたと見ている。

ところで、「人間は自由を持っている」と一般的に考えられているであろう。自由には程度の差があり、無生物には全く自由はないのに対して、生き物には何程か自由があると考えられているであろう。植物も石と比べれば何ほどかの「主体性」ないし「自発性」を持ち、何ほどかの自由を持つと見るべきであろう。植物は「生きていく」とみなされるゆえんである。植物と比べれば、動物はずっと大きな主体性（自由）を持っていると言えるが、しかし人間の主体性・自由は高等動物の「類人猿」のそれをも越えていて、本当に自由を持っていると言えるのは人間だけだとも見られなくない。それは、人間だけが「言葉」を語ることができるということと密接であろう。人間が言葉を語ることができるということは人間が規則を定めることができるということと密接である。言葉の規則を定めることができる人間は、言葉だけでなく、生活の全般にわたって様々な規則を定めることができ、それだけ多様な生活形態を持っている。しかし人間が定める規則は、その規模においても、繊細さにおいても、純粹の法則の足下にも及ばない。法則を定めた存在は——法則とは別の存在であろうと、或いは法則自身であろうと——ありとあらゆるものをあらしめた最も「原初」の、「大元（おおもと）」の、存在であり、また完全に「自由な」、そして最も「偉大な」存在である。それはまさに「神」と呼ぶほかないものである。その神は間違はなく存在する。存在しないなら、今現にあるすべてのものが存在しないはずなのである。

こうして、人類が「神」と（或いはそれに該当する名で）名付けて来た存在が存在することは間違いない。ただ、神が持つ力や働きや性質については詳しい分析や説明が必要であり、それは様々な宗教や哲学などで多様に行われて来ているであろう。

これまで、神は存在しないと考えて来た人は、以上の主張をどう受け止めるか、答えを求められるであろう。法則を定めた、法則とは別の「神」という存在を認めない人は、法則が一番原初の、大元の、存在であると考え、ことになるはずであるが、その一番原初の、大元の、「生きている」ものをなぜ「神」と呼んではならないのか、以上の私の考えに対決する形で説明することを求められるであろう。多くの人は、神は法則と別か、それとも別ではないかの問題には立ち入らずに、万有をあらゆる一歩大元のもの、一番大いなるものを「神」と呼んでおり、そのことに異議はないであろう。<sup>(8)</sup>

さて、この言葉には更に次の一言を添えるべきであろう。と言うのも、植物から人間までが「生物」である、つまり「生きている」と言えることの判断基準は、当のものが「自発性」を持っている、即ち「自由である」とであった。高等動物の中でも人間が最も高度だと言えるのは、人間こそが最も明確な自発性・主体性を持ち、最も自由な存在であるからである。ところで、これが事実であるなら、更にまた次のように言うべきであろう。

ありとあらゆるものを現にあるようにあらゆる最も「原初」の存在、また完全に自由な存在——「神」——はまた「完全に生きている」。

もしこれが正しければ、次に問われることは以下のことではないか。

では、「完全に自由で、完全に生きている」とはどういうことか、どういう状態にあることか？

創世記冒頭の言葉はこの点について次のように述べている。

地は混沌であつて、闇が深淵の面おもてにあり、神の霊が水の面おもてを動いていた。

「神の霊が水の面を動いていた。」「神の霊が」という表現は、「何ではなくて、神の霊が……」なのか。それは「神の肉（肉体）が」ではなく、「神の霊が」である。「霊」の反対概念は「霊・肉」の「肉」、言い換えれば「肉体」だからである。神は「肉体」としてではなく、「霊」として存在している。神は霊として存在しているが故に、完全に自由で、完全に生きているのである。しかし、では、「霊」とは何か？「霊」とは「心」のことか？

これに対しては、「霊」と「心」とは違うというのが聖書と聖書を奉ずる宗教の答えである。<sup>(9)</sup>では、両者はどう異なるか？

二つの決定的な違いは、「心」は人間や動物の中に存在するだけであるが、「霊」はそうではないことである。霊は本来はむしろ人間の外に存在する。そしてそれが人間に宿ることもあるのである。



心は人間の中に存在する。——このことの何よりもの証拠は「心」と訳される言葉は「心臓」という意味も持っていることである。英語では「心」と訳される言葉は「heart」であるが、「heart」には「心臓」という意味もある。それはギリシア語の「kardia」でも、ラテン語の「cordis」でも同じである。おそらく心の喜怒哀楽の反応には心臓の鼓動の反応が結びついているからであろう。そもそも日本語で血液循環のポンプである臓器に「心臓」(心の臓器)という言葉が当てたところに「心」と「心臓」の密接さがよく表れている。しかし心の動きは心臓の動きとして感じ取られるだけではない。心の動きや働きは何程か体全体で「体感」されている。そこに「心」全体と「体」(肉体)全体との密接な関係がよく表れている。

しかし「霊」はそれとは違う。霊は本来人間の「外」に存在しているのである。

ただ、人間の外に存在すると言っても、それは人間の外部の空間の中——空中——に存在するということではない。霊が物質であるなら、人間の「外」にある霊は人間の外部の空中にあるであろうが、霊は物質ではなく、非物質であるからである。

では、霊は一体どこに存在するのか? 「霊」と「肉(肉体)」との決定的な違いは何か。それは肉(肉体)は物質的存在であり、従って常に時間的・空間的世界に属すのに対して、霊はそうではないということである。霊は時間的・空間的な物質的世界とは別の世界に存在する。そのような霊であって初めて、霊は神の「実体」であり

得、且つ「完全に自由であり、完全に生きている」という状態にあり得るのである。

靈は非時空的な次元で完全に自由であり、完全に生きている。別の言い方をすれば、完全に自由に自らの働きをなす。そういう靈である存在として神は非時空的な次元で完全に自由に生き、完全に自由に働かれるのである。

既に法則は非時空的な次元に存在することを見た。一方神は靈として非時空的な次元に完全に自由に生き、働くことを今見た。このことは、神と法則の関係は、神が法則を定めたということであることを示唆するであろう。

このような靈的な存在である神を聖書は「聖なる靈」、「聖靈」(The Holy Spirit)と呼んでいる。神は聖靈として時空的でない世界で完全に自由に生き、完全に自由に働かれるのである。

一方、人間は肉体で生きると同時に、靈においても生きている。もちろん肉体での生き方と靈での生き方はそれぞれ別の次元においてであるが。従って、人間は肉体が健康であると共に靈的にも健康でないときには、「健全に」生きているとは言えない。ところで靈的な働きの中心をなすものは何か。それは「愛」である。ただ、その「愛」は肉体的な愛、いわゆる恋愛、ギリシア語の「エロース」(eros)ではない。そうではなく「靈的な愛」、聖書で説かれる愛、ギリシア語の「アガペー」(agape)である。それは端的に言って相手を「尊い」と、また自己を尊くあるべきものと、感じて愛す愛、「尊びの愛」である。それは聖書で繰り返し説かれる「聖なる愛」で

ある。人間がこの聖なる愛に生きるようになることは、根本的には、神の聖なる愛に出会うことによって初めて生まれる。<sup>(10)</sup>

註

- (1) 引用は、特に断りのない場合、新共同訳から。イエス・キリストを指して「ことば」と言うときには、通常の漢字「言葉」を避け、「言」という漢字を当てるのが、多くの日本語訳聖書の伝統である。
- (2) 紀元前3〜1世紀にギリシア語に翻訳された『七十人訳旧約聖書』
- (3) 筆者の検索に誤りがなければ、284回。なお、新約聖書では15回。例えば、本稿に密接なものとして、詩篇第36編6節「主のことばによって、天は造られた。天の万象もすべて、御口のいふきによって。」(新改訳)
- (4) 但し、日本語訳聖書が「律法」と訳しているギリシア語聖書の原語は  $\lambda\omicron\gamma\omicron\varsigma$  ではなく、 $\nu\omicron\lambda\omicron\gamma\omicron\varsigma$  であることが圧倒的に多い。
- (5) この違いがあるためか、数学の「法則」は日本語では「法則」ではなく、(例えば、ピタゴラスの)「定理」と呼ばれ、ギリシア語は (Πυθαγόρειο) θεώρημα である。英訳は (Pythagorean) "theorem"。
- (6) こう述べることに対しては、次のような疑問が向けられるかも知れない。「そうなら、ロゴスはイエスであり、またロゴスは法則でもあるわけであるから、イエスは法則だということになるのか？」それに対しては、「その通りだ」と答えたい。何よりも真っ先に、イエスの言葉は法則なのである。もちろん自然法則ではなく、人は如何にあるべきかの、如何に生きるべきかの法則である。そしてイエスの本質はイエスの言葉なのであるから、その点を押さえれば、イエスの本質は法則である。
- (7) これ以下の部分は二〇二〇年に書いた論考「聖書の神観は、果たして、また如何に、現代の科学的世界観と折り合うか？」と部分的に同主旨ないし同一である。また、二〇一九年に書いた「神はどこに、どのように、存在するか?——ビッグバン理論を踏まえつつ——」とも内容が重なり合う点が多い。

(8)

以上の主張に対して、次のような疑問ないし反論があるかも知れない。——あなたは、近代になって科学的法則が発見される以前は、人類は法則に当たるものを神と呼んでいただろうと言うが、しかし人類が「神」と呼んでいたものはむしろ「自然」ではないか。自然が法則に従って推移・変化しているということを知る以前から人類は神を崇拜していたのであり、その時の「神」とは要するに自然ではないか。雷鳴を「かみなり」と呼んだように、人知を超えて圧倒的威力を持つ自然を人々は「神」と仰いで、信仰していたのではないか。

これに対しては、それはその通りだとまず答えたい。但し、その時に人類が抱いていた「自然」のイメージは、現代の我々が抱く「自然」の概念とは極めて異なるものであったであろう。昔の人間が抱いていた「自然」のイメージは、何よりも「正確なことは不明な大きな謎」であったのであり、その「不可解・不可思議な、しかし圧倒的な威力を持つ大いなる自然を支配している更に大元の大きい何かが「神」だ、或いは、むしろ「神々」だ、と捉えられたのではないか。自然が法則によって支配されているということは近代になって、科学の発達によって知られて来るのであるが、そこで神と法則との関係が問題にされるようになったであろう。

(9)

日本語訳聖書はなぜかマタイ5・3を「心の貧しい人は幸いである」と訳してきているが、この箇所「心」の原語は *meqan* (プニユマ) (英訳は *poor*) であり、「霊において貧しい人は幸いである」の方が忠実である。「心」と訳されるのは *kapôia* (カルディア) (英訳は *heart*) であり、「心の清い人は幸いである」(マタイ5・8)の場合にはまさにそうである。なお、「霊」と「心」の他に、類似の言葉として「魂」(プシケ) という言葉もあるが、これはやはり「霊」と対比されることはヘブライ人への手紙4・12「神のことはは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、魂と霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやばかりごとを判別することができません」に明らかである。

(10)

聖書に出てくる「天国」とは「神の国」であり、それは既に見た「霊の世界」であろうが、では、やはり聖書に出てくる、天国の反対の「地獄」とはどこにある、どのような、世界か。それは人間が地上での最も墮落した生活を終えて、そこへ追いやられる世界であろうが、言うまでもなく、あらゆる点で「天国」(「神の国」と反対の世界であろう。では、より具体的には、それはどのような世界か。そこへ行くのはそもそも何か?人間の肉体ではないはずである。死んで単なる物質の塊となった肉体は大地に帰属するだけであろう。各人に宿っ

ていた「霊」が帰属するところでなければならぬ。しかし霊と言っても、生きた霊ではないであろう。罪とは、端的に言って、霊における死なのであるから、生きている霊ではなく、死せる霊が属する世界であろう。それは肉体も霊も完全に無に帰す、完全な「無」の世界か。